

第1章 大自然とひとつらなりの生命



生命とは？ 仏典と量子力学の教え

われら何処いずこより来たるや

われら何者なるや

われら何処いずこへ行くや

アメリカのボストン美術館の二階、十九世紀の巨匠たちの作品が展示されている部屋。その真正面にかかっている、ゴーギャンが死を決意した一八九七年に芸術的遺書として描き上げたという、畢生の大作の画題である。物理学者佐治晴夫先生著、「宇宙の風に聴く」から引用させていただいた。

先生は「この問いかけに心奪われぬ者はないであろう」と……。仰せの如く私もこの問いかけに心奪われた者の一人である。このあまりにも素朴、そして本質的な問いかけに対

する答えは？ 私はこれを仏典と量子力学という一見異質のものの中に共通の答えを発見した。

仏典には「この身は四大からかりにあつめてつくり立てたるものなり」とある。また、「四大を身となす」ともある。四大とは地、水、火、風のことである。

仏典はさらにいう。「この地水火風をはなれて我が身というべきものなし、ただいまなりとも命をはりて地水火風にかえりぬれば、ただ白骨となりて自然界に戻るべし」と。

そのうえで仏典は、このこと、つまり「この身は地水火風の四つの要素から成ることを人はよく記憶していなければならぬ」と論している。

ところで、先のゴーギャンの問いかけに、新しい量子力学が仏典と同じ答えを出しているのである。その教うところは、物質を細分化してゆくと分子の世界になる。分子は原子で構成されている。原子の中心にあるのが原子核である。原子核は陽子と中性子から成っている。その原子核の周囲をもつぐい速さで廻っているのが電子である。

こうした素粒子は日常目にする物体に比べて極めて小さく、目方を量ることができないほど軽い。しかし質量があること、つまり存在することは確かである。

こうした素粒子の間ではエネルギーの授受（やり取り）が行われている。量子の力関係を探究する量子力学の進歩は目覚ましい。最近の理論はミクロの世界に止まらず、全宇宙の法則が量子力学でとらえられるようになった。

すなわち、右の素粒子間でやり取りされているエネルギーは、一体何処から来ているのだろうか？ という疑問につき当たったとき、それは宇宙から来ているということが分かって、量子力学はミクロの世界だけに止まっておられなくなった。宇宙というマクロの世界に眼を向けなければならなくなったのである。

宇宙エネルギーは燃ゆる星、恒星から発せられている。太陽のような標準的な星では、水素を燃やしてヘリウムをつくるという反応によってエネルギーが作り出されている。核融合と呼ばれる反応である。わずか一グラムの水素からなんとてんぷら油二十トンに相当するエネルギーが作り出されるという。この光のエネルギーによって、地球上の生きとし生けるものが生かされているのである。

ちなみに、宇宙から地球上に飛来している原子として酸素、水素、窒素、炭素の四原子が挙げられている。まさに仏典のいう四大と合致するではないか。四大（地水火風）とは、量子力学の視点からは太陽エネルギーのことなのである。

かの親鸞聖人は「教行信証」という自著に、「つつしんで真仏土を按ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり」と記している。真実の阿弥陀仏は光そのものであると言っている。虹をつくり出す太陽の光の量子と同じ存在なのである。古い仏典にしても新しい量子力学にしても、先のゴーギャンの問いかけに同じ答えを出していると言つてよい。

Q・われら何処より来たるや？

A・地球のこの世界を含めて、宇宙は素粒子の世界である。われらはその素粒子の世界より来ている。

Q・われら何者なるや？

A・われらは素粒子の凝縮した存在である。

Q・われら何処へ行くや？

A・その素粒子の世界へ還つていく。

このような大自然とひとつらなりの生命……、その生命力の衰え——虚勞に直面したときは、生命素による補陽が劇的にいのちもうけに働いてくれることに思い至るのである。